

あとがき

琉球に関する経済学の本はこれまで数多く出版されてきたが、植民地経済の分析を踏まえ、琉球独立を前提にして論述された経済学の著作は本書が最初ではないかと考える。早稲田大学政治経済学部経済学科に入学してから、経済学という学問と出会い、それと格闘してきた。東京都狛江市にある南灯寮に入り、琉球人男子学生50名とともに4年間生活した。そこで寮生と議論しながら、琉球の歴史や文化を学び、琉球人としてのアイデンティティを自覚し、琉球人差別を乗り越えるための経済発展の可能性に関心を持った。東京にあるユダヤ教寺院に行き、経済活動とアイデンティティとの関係についてユダヤ人にインタビューをしたこともある。南灯寮時代から現在まで、寮のOBである西銘生仁さん、嘉手納安男さん、當銘明さん、喜屋武靖さん、与那嶺功さんは私の研究を励まし、琉球経済の実態を御教示下さった。

大学4年に外資系証券会社入社の内定をもらったものの、琉球の経済をさらに深く研究したいという気持ちは止めがたく、大学卒業後、1年間の大学院研修生を経て、早稲田大学大学院経済学研究科修士課程に入学した。世界経済論、経済発展論、経済学史を専攻し、琉球とも関係が深い西川潤先生を指導教授とさせ頂き、太平洋諸島と琉球とを比較しながら、島嶼経済論を深めていく上で多くの教えと研究の機会を頂戴した。西川先生は、博士課程の在学中だけでなく、私がグアム、パラオで働き、東京や那覇で生活した5年間も含めて博士号申請論文の研究指導をして下さった。その御陰で、学位を早稲田大学から授与され、『沖縄島嶼経済史—12世紀から現在まで』（藤原書店、2002年）として出版することができた。西川先生からは第三世界の国々で生まれた経済学について学ぶとともに、「民衆の視点から経済学を考える」という研究姿勢を学び、フィールドワークに基づくケーススタディと経済理論・思想との融合、問題解決策の提示という研究手法を体得することが可能になった。

早稲田大学、国際日本文化研究センターにおいて、文化・物産複合論に基づく経済史や、アジア太平洋における琉球の政治経済的可能性について教えて下

あとがき

さったのが、現在、静岡県知事をされている川勝平太先生である。^{かわかつへい た}「西太平洋津々浦々連合」という琉球を含む西太平洋の島々が経済的に相互につながり、経済自立を達成する上で必要不可欠な歴史的考察に関する多くの示唆を受けるとともに、前職である東海大学海洋学部海洋文明学科で働き、アジア・太平洋に関する様々な研究会に参加する機会を頂戴した。また私は大学院生時代に川勝先生の経済学演習で輪読した英文のシュンペーター経済学の本 (*Evolutionary Economics-Applications of Schumpeter's Ideas*) を現在、読み直し、他の経済学の文献と合わせて琉球独立に関する経済学的研究をさらに深めている。

宮古島出身でイリノイ大学名誉教授の平恒次先生^{たいらこう じ}の専門は労働経済学であるが、「復帰」前から琉球独立を経済的に研究されてきた。2015年9月に先生とニューヨークで一緒に研究会において報告する機会があったが、琉球独立を学問として研究され、独立の必要性を強く主張される先生のお姿に感動した。先生は、経済学者として琉球独立を研究する琉球人の先達であり、真摯な研究活動に大変励まされ、今後のさらなる研究意欲も呼び起こされた。

「島嶼平和学」を提唱されている佐藤幸男先生^{さとうゆき お}は、大学院生であった私を自らが主催するトヨタ財団研究助成の「アジア・太平洋マイクロステート研究会」に参加させ、フィジー、ニューカレドニアにおける国家形成、独立運動を経済学的に研究する機会を与えて下さった。この研究会での活動は、太平洋の極小島嶼国と比較しながら琉球独立を考察する最初の契機となった。その後、先生のご紹介によりグアムやパラオの総領事館や大使館で専門調査員として働きながら両島嶼の歴史・文化や政治経済を学ぶことが可能になった。また先生の御陰により2014年には韓国の研究者と琉球の基地問題や独立について議論するとともに、韓国現地でのフィールドワークにおいて、同国の王国史、戦争被害の実態そして脱植民地化運動を琉球のそれらと比べながら考えることができた。さらに先生が講師を務める東京大学大学院の授業において私の琉球独立に関する著作を教科書として採用し、学生が琉球独立を学問として議論する場を設けて下さった。

学問や思想におけるリベラリズムを特徴とする龍谷大学において、琉球や太平洋に関する経済的研究を進めることができた。経済学部、経済学研究科の学

生や教職員にも研究活動の上で大変お世話になった。学生や教員とは琉球や太平洋諸島における経済的自立，基地問題，独立等に関して真摯に議論させて頂いた。特に大学院の授業において，ベリーズ，カンボジア，東チモール，フィジー，中国，韓国，エチオピア，タンザニア等の留学生からは出身国における経済的可能性や課題，国家の形成や運営等について学ぶところが多かった。

その他，多くの先生や諸先輩から教えを頂いてきたが，本書においては特に上記の方々を挙げさせて頂き，心底よりその学恩に感謝を申し上げたい。

私の著書の1つである『琉球の「自治」』（藤原書店，2006年）は，琉球における自治（内的自己決定権）と内発的發展との関係を分析した研究書である。私のグアム，パラオにおける研究活動を踏まえて，ミクロネシア諸島の歴史，政治経済，社会と琉球のそれらとを比較しながら論述した著作が，『ミクロネシア一小さな島々の自立への挑戦』（早稲田大学出版部，2008年）である。

琉球が「日本国の一部」として収まる島嶼地域でないことは，その歴史，文化，社会構造から明らかである。国際法，歴史学，国際関係論，政治学，社会学，経済学等，学際的な手法を駆使して，琉球独立の理由，思想的根拠，方法，将来像について論じた著作が『琉球独立への道—植民地主義に抗う琉球ナショナリズム』（法律文化社，2012年），『琉球独立論—琉球民族のマニフェスト』（バジリコ，2014年），『琉球独立—御真人の疑問にお答えします』（Ryukyu企画，2014年），『琉球独立宣言—実現可能な5つの方法』（講談社文庫，2015年）である。本書は，私の本来の専門である経済学を柱にして琉球独立を考察したところが最大の特徴である。歴史学，国際法，国際関係論，政治学，社会学等の観点から琉球独立を検討したい読者は，これまでの私の著作を参照して下さいようお願いしたい。

本研究は，文部科学省の「科研費（基盤研究C）」（研究期間：2011年4月—2014年3月）「沖縄県の振興開発と内発的發展に関する総合研究」から提供された研究助成金に基づきフィールドワーク，資料収集を行うことができた。また，NPO法人「ゆいまーる琉球の自治」が主催する，2007年から2013年まで年2回のペースで琉球の島々で開催された「住民の集い」における議論や島々でのフィールドワークも本書の完成において大きな役割を果たした。科研費研究活

あとがき

動や「住民の集い」において、私のインタビューに応じて貴重なお話を聞かせて下さった方々に心よりお礼を申し上げたい。

NPO法人「ゆいまーる琉球の自治」の活動において、琉球の島々を歩き、島の方々から直接、島の歴史や文化、経済の実態等を学ぶことができた。経済学の理論、思想、政策は、現場で生きる人々の具体的な生活を土台にしなければ、現実から遊離したものになる。「経世済民」の学問としての経済学が、地域の民衆の手から離れないように常に私を現実世界に引き戻して下さったのも、琉球の島々で出会った人々であった。

石垣島で生まれ、幼少期に同島のほか南大東島、与那国島、沖縄島で生活したという経験が、私が現在に至るまでも琉球に強くこだわり、一貫して島嶼経済を研究のテーマにすることができた理由である。そのような運命的な機会を頂いたのは、琉球气象台（「復帰」後、沖縄气象台に名称変更）で働いてきた父親ひろしの寛と、母親のトヨ子や弟の泰之やすゆきの御陰である。家族4人で琉球の島々で生活してきた記憶が、現在の研究活動にも大きな影響を与えている。NPO法人「ゆいまーる琉球の自治」を設立した時に、父親も理事の1人に加わり、同法人の事務的な仕事を引き受け、母親とともに琉球の各島で開かれた住民の集いに参加して、意見を述べた。両親は琉球民族独立総合研究学会の会員になり、学会大会やオープンシンポジウムにも足が不自由でありながらも毎回のように出席してくれた。私の研究活動を物心両面から常に支え、応援してくれた両親にも心から感謝したい。

本書の校正作業の一部は年末年始の琉球で行われた。豊見城にある病院の待合室でも校正作業をした。カーテンで仕切られた病室から三線の音が聞こえた。また廊下の待合椅子に座っていた時、琉球の民謡を浪々と唄う女性の声が耳に残った。病室では家族がしまくとうば（琉球諸語）で会話をして患者さんを励ましていた。人生の危機的状況にある琉球人に生きる力を与えてくれるのが琉球の文化であることを、改めて確認し、嬉しかった。献身的に患者さんをケアする若い医療従事者を見ながら、独立後の琉球の医療福祉のあり方を考えた。自らの病に負けない勇気を持ち続け、生きる本源的な喜びを実感している患者さんの姿に学びながら校正作業を進めた。

本書の編集者である法律文化社の小西英央氏^{こにしひでお}とは2011年に日本平和学会で開催された琉球の自己決定権に関するフォーラムの時に会った。小西氏からの勧めもあり、前著の『琉球独立への道』を出版することができた。今回も本書の編集にあたり大変お世話になった。本書の編集上において大変貴重なアドバイスや励ましの暖かい言葉を頂いた。心底よりお礼の言葉を申し上げたい。私の著作以外にも、琉球の平和に関する多くの著作を編集し、出版され、琉球が抱える問題を日本社会に継続的に発信し、琉球について深く考え、議論する機会を提供されており、敬意を表したい。

琉球独立に賛同する方だけでなく、それに反対する方からも多くのことを学ばせて頂いたことに対しても感謝したい。この著作によって琉球独立に関する議論がさらに活発に展開されるようになれば幸いである。真摯に議論をさせて頂き、次の研究につなげたい。

豊見城にて人が生きる本源的な喜びに接しながら

松島泰勝